# くらふと
## 県育協だより

発行
鳥取県子ども家庭育み協会
広報委員会
第14号
平成23年10月

この広報紙は
赤い羽根共同募金の配分を
受けて作成しています。

## 「子ども・子育て新システムに関する中間とりまとめ」を考える

鳥取県子ども家庭育み協会　会長　大橋和久

本年7月、基本制度ワーキングチームにおいて、他の2つのワーキングチームとともに約1年かけて積み上げてきた議論の到達点として「子ども・子育て新システムに関する中間とりまとめ」として示された。

この6月30日には「社会保障と税の一体改革案」が公表されている。そこで示されている「子ども・子育て新システムの基本制度案要綱」を踏まえ、平成23年度中に法律制定を講じ、平成25年度に実施としている。

「中間とりまとめ」で基本理念として「子どもは社会の希望であり、未来をつくる力」とし、幼児期の育ちが重要で子どもの最善の利益を考慮すべきとしている。

新システムの制度変更により幼保の一体化（こども園給付）、多様な事業主体の参入、直接契約制などによる保育の量が必然的に拡大へ進むことは必至である。

質の改善（機能強化＝職員配置基準の改善、職員給与の改善など）については、量的拡充を合わせれば1兆円を超える額が必要としている。

しかし現時点でいえることは、質の改善を図るための恒久財源をどのようにして確保するのか全く示されておらず、制度のみの変更は保育の量の拡大のみが先行し、逆に質は劣化することは自明である。政府は法案成立後に可能なものから段階的に質的改善を図るとしているが、何ら担保できる確証はない。

現在の保育現場といえば、職員配置基準、職員給与の低さや職員の非常勤化率の高さなど他の児童福祉施設や介護保険施設などと比べても劣悪な実態にある。

これ以上保育の量のみの拡大を目指し、質の改善をなおざりにすれば、本来的に有してきた児童福祉施設としての保育所の終焉であり、その理念とは全く矛盾したものとなって行くことが予想される。

「税と社会保障の一体改革」では消費税収入を主たる財源とし、社会保障安定財源を確保するとしている。しかし、2010年代半ばまでに段階的に消費税率を10％まで引き上げるとしているが、これさえも現政権のマニフェスト至上主義を唱える隠然たる主導者が消費税率を上げることを強く否定している現状では極めて困難である。

９００兆円を越える借金財政や医療、年金、3月11日に起こった東日本震災の復興、肝炎補償の問題など日本社会の現況を考えれば、仮に消費税率が10％に上がっても子ども関連予算に回ることは考え難く、15％に上げて初めてその遡上に上がると考えるべきだと駒村康平氏（慶応大学経済学部教授＝基本制度ワーキングチームメンバー）が述べている。

これら客観的に考察すれば、「子ども・子育て新システム」に必要とされる恒久財源の確保のメドが全く立っていないと言わざるを得ない。

保育団体は「子ども・子育て新システム」という制度改革に乗じて、「職員配置基準、職員給与など」保育の質の改善を図る絶好の機会であるとしてワーキングチームに参画し、申し入れや意見を述べてきたと表明しているが、肝心要のほとんど反映されない結果となっている。

戦後一貫して保育園（保育制度）が果たしてきた役割はもっと評価すべきであり、その役割は決して終焉していない。

保育園（保育制度）は児童福祉施設として「格差のない子どもたちの育ち」を保障し、日本の産業の発展の原動力である女性への就労支援など重要な役割を担ってきた。

子育て支援・保育サービス充実政策は、これからの日本社会が必要とする人材育成、有能な労働力確保を目指し、国家戦略としても最も効果がある資本投下であると多くの良識ある政治・経済学者が述べている。

既に本年4月の通常国会で、保育所の最低基準の都道府県への条例委任をするための法律改正が行われた。

現状のまま、つじつま合わせの地方分権化（地方主権）や安易な制度変更が行われれば、「地域格差」や「保育の質の劣化」が生じる恐れがあり、深刻な禍根を日本の将来にもたらすことにもなりかねない。

## 「レッジョ・エミリアに学ぶ」とは

赤碕保育園 園長　福田泰雅

北イタリアの小都市、レッジョ・エミリア市の幼児教育施設の展覧会が、10年ぶりに日本で開催された。このたびは、東京青山のワタリウム美術館で期間中に開催された研究会において、以下の各氏、佐藤学（東大大学院教授）、津守眞（発達心理研究者、前愛育養護学校保育者）、芦原太郎（建築学会会長）秋田喜代美（東大大学院教授、保育学会会長）、カルラ・リナルディ（レッジョ・チルドレン代表）などによって語られた重要な点を報告という形でお伝えしたい。

### 幼児教育の未来を先取り

レッジョ・エミリア市の実践が幼児教育の世界でこれほどまでに注目を浴びている理由は、表向き表現教育や、幼児教育指導主事（ペダゴジスタ）やアトリエリスタ（芸術士）などが保育にかかわるユニークさにあるようだ。

しかし、本質はその徹底した幼児教育哲学と実践の間を行き来する実践智の中にある。レッジョ・エミリア市の保育実践は、次の3つの点で、未来の教育を先取りしてきた。①人々（市民）の連帯や協同性、②相互性やその中で展開し醸成される互恵性、③表現にかかわる想像性やその中で育まれる創造性、あるいは知を自ら構成する科学性である。それ故に幼児教育の未来がここにあると言われている。

### 学び続ける人

この中で保育実践は、いつでも経験から学ばれて日々新たな学びの物語として更新されている。決してシステムを作り、子どもをその中に納めて育てるものではない。

現実、レッジョ・エミリア・アプローチにおいては、人は一生涯学び続け、自ら知識を構成する有能な存在として認識し、子どもも大人も学びながら保育を実践している。つまり、保育する側も常に学び続けて自らをアップ・デートするのである。

保育所保育指針では、保育課程の編成を求めているが、本来保育課程は、頻繁ではないものの固定的ではない。実践を通じて学び、それらを昇華させて作られたものであり、実践のフィードバックあるいは学びの軌跡である。

現代社会は、早く、正しく、大量にという近代の価値観から、一人ひとりにとって価値あるモノを生み出すポスト産業社会へと変化している。この価値観の中で、世界の教育も全体的には、学習すべき知識を脳に刷り込む「模倣的学習」から、自分で知識を構成する「変容的学習」へとシフトしている。

ところが日本の教育は、いまだに模倣的学習を効果的に遂行するためのシステムつくりに躍起となっている。世界が学習観そのものを変えているこの時期に、異なる教育哲学や科学で「前時代的な教育」を行っていて、その自覚すらない。

### 子どもの声を聴く

私たちの社会は、集団に合わさせられる場面が多い。それらを何の不思議もなく受け入れているが、効率性や結果重視によって横のつながりを失わせた縦型社会（上下関係）が単なる集団志向へ強く働くことにより、上意下達の息苦しさや思考停止を作り出している。これらは経済界にとどまらず、行政、教育、子育て、保育、医療などあらゆる分野においても同様に、人間関係を希薄にしている。

それらを修復するため、哲学としての連帯性や協同性は、保育において「対話する、共有する、一緒に学び合う」ことの重視として具体的に実践されるが、その根底には「他者に対する**応答責任を持つ**」ということを含んでいる。

近年、我が国の保育は、子どもを対象化し、欠点を暴くことに躍起になっている。大人と子どもを切り離し（自分が以前子どもであったことも忘れ）目の前の子どもではなく、標準的発達の目安と見比べながら、「あれも、これもできていない」と減点することに熱中している。これこそがつながりを奪う上下関係による縦割りだと気付かぬまま、療育の視点のみで子どもを切り取り、それが保育だと勘違いしている。保育は療育だけで成り立っているのではない。

「保育とは、子どもの声なき声を聴くことである。子どもの代弁者ではなく、翻訳者であるべきだ」と津守氏は語った。一人一人の声を聴き、興味・関心を持っているものに興味・関心を示す「共感」から保育が始まらなければならない。それが人として果たすべき応答責任である。すべての人の声に応じない現代の保育は、まさに危機的状況にある。

### 文化を意識して実践する

レッジョ・エミリア市の実践は、人間が生きるとは（哲学）、教育とは（教育哲学）、それらから導かれた保育実践の手法のユニークさなど、初めて向き合った時、非常に難解である。

それらの理解のためにも、初めは保育実践の手法から忠実になぞってみることも必要であろう。そして、常に実践を振り返りながら目指す保育とは何かを描き直し、時間をかけて自分たちの保育として構築されなければならない。

レッジョ・エミリア市の実践は、イタリアという土地柄や都市国家として歩んで培ってきた文化の延長線上にある。しかし、その文化から学ぶことは多い。その他、我々とは異なる多くの文化から学び、咀嚼し、自分たちの価値観を明確化し、広く現代社会を見渡し、歴史に学び、子どもとともに文化を創り出す行為が保育の質を高める源泉ではないだろうか。まずは実践である。

# 第57回 中国地区保育研究大会

**とき　2011年7月7・8日(木)・(金)**
**場所　山口市民会館他**

**鳥取県子ども家庭育み協会 副会長　原崎保子**

「すべての人が子どもと関わりをもつ社会の実現をめざして」の主題をもとに、バイオリンの生演奏に合わせ、保育の歌「花のおさなご」で大会が始まり、東日本の震災で亡くなられた方々の冥福を祈って黙祷をささげた。

来賓の皆さんの祝辞、小川会長の基調報告で、ワーキンググループによる「子ども・子育て新システム」などの検討状況について伺った。

壇上はクールビズで涼しそうに見えたが実はライトで汗だくだったそうである。

つづいて広島市の研究発表「わらべうたで何が育ち、何を育てるのか～」について、一日の流れが〝わらべうた〟をきっかけにはじまりスキンシップ、ふれあいあそび、ごっこあそび、保育参観日、子育て支援などあらゆる場面で自然に取り入れられ、歌声にあふれた保育園の発表であった。そらいろの家の高城先生の指導のもと〝みんなと共に歩む〟をめざして保育をされている様子を知ることができた。

梅光学院大学教授　今村方子先生より、人は言葉の前に、歌いたい、伝えたい、出したい気持ちがあり、日本語独特のリズム感が〝わらべうた〟につながっていると助言をいただいた。

午後は分科会討議13：30～16：30の間、7つの分科会が開かれた。

**第1分科会**　テーマ「保育所保育指針に基づく質の高い保育を提供する」について、島根県　庄原保育園　遠藤由香保育士、出東保育園　増田美栄子保育士により、エピソード記述を活用して各園の勉強会、ミニ公開保育、年齢別の会、町全体の勉強会を行い、人間性や専門性が高まりあっている提案だった。

**第2分科会**　テーマ「配慮を必要とする子どもの保育の充実」について、鳥取県　倉吉市立関金保育園　亀本恵美園長により、子どもや家庭への支援のあり方、関係機関との連携について、行政や医療機関、コーディネーターも一緒になって保育園から学校へつなげていった報告であった。地域の皆さんの協力や支援は「ありがとう」「うれしい」と言う言葉のやり取りで大きな力になっていった。

**第3分科会**　テーマ「保育士の資質向上を図る」について、山口県　山口市立山口第二保育園　林和子園長により、保育所内外の研修のあり方や保育士の自己評価などの、効果的な実践やあり方として、新規採用保育士育成のため主任保育士が1年間寄り添って関わることで、中堅保育士も共に育ち、新規採用保育士は意欲や責任感が芽生え、保育士としての即戦力となってきているという嬉しい提案であった。

**第4分科会**　テーマ「地域の保護者支援の充実」について、広島県　広島ＹＭＣＡ保育園　子育て支援相談員　前田星子さんにより、保育所と保護者が子どもの成長をともに分かちあえる関係作りを目標として、保育所利用者、地域の子育て家庭に、育児相談・電話相談・勉強会などの情報を発信して安心感のもてる居心地の良い場の提供に努めているという支援についてであった。

**第5分科会**　テーマ「家庭の連携による食育の推進」について、広島県子ども食事研究会　吉田保育所　広瀬ゆみ子所長により、〝食べる〟ことは命と育ちを支える尊い営みである。自園方式が当たり前と思っていたが、業務委託、外部搬入に変わってきている。三つの方法についてのアンケートをもとに良さや課題を考え、乳幼児期の「食」を大切に、親と子が繋がる支援をしているとのことであった。

**第6分科会**　テーマ「コミュニティの再生・子育て文化の創造にむけて」について、岡山県　赤磐市吉井保育研究会　原　直子、前田信美先生により、吉井地域に受け継がれている春夏秋冬の祭り文化を通して、保育園と地域が語り合い支えあう関係づくりをしている提案であった。

**第7分科会**　テーマ「保育所制度の動向と課題」について、保育園を考える親の会　普光院亜紀代表により、保育をめぐる制度や政策の動向、将来的な保育ビジョンや保育所長の責務・役割を学び、これからの保育所のあり方が話し合われた。制度や政策を「子どもの最善の利益」を基に考えてほしいと感じた。

**記念講演**　「人格形成における保育の役割」～子どもは社会の宝、社会を映す鏡～について、音楽家・前埼玉県教育委員会委員長　松居和先生の講演を聞いた。

マイクを持って演台の前で0、1、2歳児の無意識の笑顔が、大人をつなぎ心を一つにできる人間社会の源であること。海外の事情、自分の生い立ち、今までの経験を笑いも交えながら話された。

中でも子どもは社会の宝、様々な手段で大人たちを育て、コミュニケーション能力や感性を高め、弱い者にやさしい社会を作り、幸せのものさしを教えてくれていることを聞いて、目から鱗であった。

あまりにも楽しい講演で聞き入ってしまいました。

閉会式は、山口県保育協会　副会長　寺本隆宏氏のあいさつ、次期開催地　広島市保育連盟　会長　瀧山永明氏のあいさつで、平成24年7月12、13日に第58回大会の開催が発表された。

分科会助言者の今村方子先生、中島俊介先生、石橋由美先生、今川元治先生、小林薫先生、伊藤一統先生、普光院亜紀様ありがとうございました。

大会役員の方々はじめ、山口県のみなさまお世話になりました。来年また会いましょう。

# 各研修会報告（5月～8月）

## 第1回施設長研修会

八橋保育園　藤原　泰江

平成23年5月25日倉吉未来中心にて、講師、鳥取県福祉保健部子育て支援総室室長の西尾浩一氏と子ども発達支援課課長の山本伸一氏をお迎えして、行政説明を受けました。

昨年同様、子育て支援総室の構造や役割等を聞く中、今年度7月より機構改革が行われると話されました。

平成24年度より、保育所最低基準は廃止され、保育の基準を都道府県が条例で定めることになりました。鳥取県は今の基準より下げることはないということで、職員配置基準など大いに期待するところであります。小学校との絡みもあるが小学校より配置基準が低いということは考えられないので保育園等の方を手厚くしてほしいところであります。『**子育てするなら鳥取県！**』と言えるような王国にしたいという思いを聞き、大変うれしく思いました。また、鳥取県は出産費用が一番安いという話を聞き、初耳で凄く驚きました。

『**子育て王国、とっとり**』の名のとおり、子どもを生み育てやすい鳥取県にしていく為に、いろいろな方面から考えられ、進められてきていることを改めて今日の話から知ることができました。

これからもいろいろ情勢が変化してくると思われるので、アンテナをしっかり張り、子育て中の親に対してしっかり応援のできる保育士や園にしていきたいと思います。

## ロマンティックをみつけよう
## 第1回保育士研修会

赤碕保育園　中島　良恵

平成23年6月25日（土）、鳥取県福祉人材研修センターにて、講師に鈴木　翼さんを迎え、地元のロケットくれよんさんと共に第一回保育士研修会（実技研修会）「つばさくんとあそぼう」が開催されました。

講演の内容は、遊び歌、ふれあい遊び、踊りなど盛り沢山で、講師の鈴木　翼さんは、私立保育園、子育て支援センターに8年勤務されていたということもあり、どの歌も現場での子どもたちの姿や経験を通して、考えられたものばかりでした。

色々と紹介された中で、「はみだしたチーズ」という歌が私の中でお気に入りで、振り付けはいたって簡単。いわゆる〝いないいないばあ〟遊びでした。この遊びは、0、1歳児が大好きで、子どもたちは、手のひらに隠れた顔がいつ出てくるのかとワクワク、ドキドキと期待して待っています。それに「はみだしたチーズ」という歌を合わせると、益々子どもたちの期待度も上がるように思いました。

他には、ある歌の誕生エピソードを紹介されました。それは、翼さんが行われた研修会で、一人の女の子から突然「つばさ（鈴木翼さん）になくてわたしにあるものなーんだ！」と質問され、つばささんが考えて言った答えはすべて「ブーッ！違う」と言われてしまい、正解がなんだったのかというと「ロマンティックでした！」と、まさかの「ロマンティックだった」というエピソードでした。この話を聞いた時、女の子の質問の内容から、答えを考える時間がありましたが、いざ、その正解を発表された時、会場からは「おー！」と、驚きと感動が混じった声があがっていました。その声の数だけ、私だけで無く、他の参加者も女の子の「ロマンティックでした」という言葉に感動すると共に、「ロマンティック」を考えついた女の子の思考に驚かされたのではないでしょうか。そんなエピソードから生まれた「ロマンティック」という歌は、ユニークな曲と振り付けで、ロマンティックってどんなの？と思わずわくわくしてしまうような歌でした。

最後に歌われた「ゆっくり」という歌は、題名の通りゆったりし

た曲調で、歌詞と自分の心境とを振り返りながら聞ける歌でした。「ゆっくり ゆっくり まえをみて ゆっくり ゆっくり いっぽずつ」というフレーズには、ついつい忙しさばかりを感じてしまう日常にも、一歩一歩の大切さを改めて感じることができました。

今回の研修会で感じたことは、普段から「こころのゆとり」を持つことで、子どもたちと一緒に目の前の事が〝キラキラ〟に見えたり、色々な事に〝ワクワク〟、〝ドキドキ〟したり出来る、そんな「ロマンティックな保育」を心がけていこうと思いました。

## 船上山少年自然の家での一泊研修
### 初任・初級保育士研修会②

育成保育園　柏木　克仁

毎年行っている初任・初級保育士研修会が6月28日から29日の2日間、船上山で開催されました。参加者は、県内の経験年数5年未満の保育士44名でした。

船上山での2日間の研修で共通する事は、子どもの可能性は無限である。無限の可能性を引き出すのが、私たち保育士であるという事でした。ちなみに一つの可能性で、小惑星衝突についてお話をさせてもらうと、衝突は必ず起こると考えられています。地球に降り注ぐ直径10ｍクラスの小天体は、1ヶ月に1個の割合といいます。このクラスの大きさだと大気圏で破裂し燃え尽きてしまいます。それでも原爆の数発分に相当するエネルギーを持っているので、大気圏が無ければクレーターだらけだそうです。もう少し大きい物は、1908年にシベリアで落下した隕石は、直径100ｍと推定され、周りの森林が直径50㎞に渡りなぎ倒されたそうです。大阪を中心とするなら東西は奈良から神戸、南北は能勢から富田林くらいで、爆音は韓国まで届くそうです。6500万年前に落下した隕石は、直径10㎞と推測され、衝突の瞬間地表の厚さ30㎞は完全に突き破られ、噴き上がった土砂は高度40㎞まで達したといいます。この時の衝撃は、マグニチュード10を越え、津波が数㎞の高さで発生し、衝突点の反対側でも150ｍほどあったようです。ちなみにクレーターは直径200㎞で、衛星で確認するまでは分からなかったほどの大きさでした。

これほど大きな隕石の衝突は、1億年に1回で、始めに紹介した隕石で直径100ｍクラスは、千年に1回という統計的にはこういった確率だそうです。これはかなりの誤差があるといわれていますのであまりに楽観的な確率だし、今すぐ起こるのか！といった思いがあるのも現状ですが、必ず近い将来大きな隕石が落下しても不思議ではないという事です。それが明日、起こるかもしれません。

話はそれましたが、必ず起きる可能性やその子の持っている可能性など色々とありますが、可能性という漠然とした事をとても身近に感じるのは自分だけでしょうか？子どものもっている可能性はすぐそこにあるように思えます。

今回の講義で「保育の質を高める」、「子どもが集中して遊び込める環境作り」などといった内容が盛り込まれ、研修に来られた保育士の方たちは、個々で色々と感じ、自分の保育を振り返って見たのではないかと思います。

この振り返る時間が自分を伸ばせる時間でもあり、子どもと向き合える時間ではないでしょうか？参加した保育士の方には、自分の園やクラスに帰ってから、自分の思う保育を実践してもらい、次回の研修会③では、笑顔で44名と再会し、実践した内容や悩みなどを話し合える事が出来たら嬉しいです。

## 第1回主任保育士研修会に参加して

神崎　睦子

平成23年7月2日（土）倉吉市地域交流センター　アゼリアホールにおいて、兵庫県立大学教授　芦田宏氏より「保育の評価」について講演を聞きました。

現在、園における自己評価が、社会的責任として求められており、明日の保育がより良いものに変わることを目的として行うものである。

自己評価に関する園内研修を深めていくことが大事であると言われました。

1　自己評価の方法としては、計画的かつ見通しをもって進めていくことが重要である。施設長は、共に学びあう職場環境を醸成しながら、保育所（園）全体で自己評価の取り組みを積極的に進めていけるようにする。

2　可能な限り全員が、自己評価に参加できるよう配慮することが大切である。

3　自己評価が、過重な負担とならないように工夫する。

具体的に展開していくためには、

4　保育士等の個々の実践の振り返りを、最大限に生かす方法であること。

5　日誌やビデオ等の記録をもとに、多様な視点から振り返る方法であること。

6　既存の評価項目等を利用して振り返る方法であること。

これらの方法を組み合わせるなどして創意工夫を図るとともに、保育士等が主体的に参画して自己評価を実施し、学びあっていくことが大切です。

実際にビデオを見て、安心度・夢中度を指標として、グループごとに評定を行うと良い。正解というのはなく、どこに着目したのかということにより考えが異なる。

評価に至るまでの議論が非常に大事で、評価の理由が必要であるということを学びました。

この研修で学んだことを、自園における自己評価に取り入れて、今の保育の現状を見て知り、明日の保育がより良いものに変わっていくように、職員全員で今後取り組んでいこうと思っています。有意義な研修をさせて頂き有難うございました。

## 第1回乳児保育研修会に参加して

若桜保育所　小林　宏美

平成23年7月9日（土）に第1回乳児保育研修会が倉吉市地域交流センターアゼリアホールに於いて開催されました。講師に鳥取大学医学部教授、井上雅彦氏をお迎えして「発達に遅れや偏りのみられる乳幼児への理解と支援」というテーマで講演をしていただきました。講演の始めに先生は、「発達障がいは脳の器質的又は機能的な要因によるものであり、障がいそのものを取り除くことは困難であるが、早期発見と適切な診断を行い適切な療育や教育と環境調整を行うことにより、社会的機能を高め改善する効果が期待できる」と話されました。私たちは日々子ども達と関わる中で、視線があいづらい、体がいつも動いている、いろいろなものに興味が移る、こだわりがある、一方的な会話が多い、コミュニケーションがとりにくいなどの特徴をもっている姿を目にすることが多くなってきているように思います。そういった子供の姿をまずは受け止め、子どもの困り感を理解していかなければなりません。そしてすぐに診断につなげるのではなく支援へ実行すべきであるということです。支援は子供はもちろんのこと保護者（家族を含めた情報）と共にしていかなくては成り立たないことです。家庭からの困り感や思いを受け止めていく。ニーズや特性に応じたわかりやすい環境を作ること。スモールステップでの達成支援を行うこと。継続的（記録と評価に基づく引き継ぎ体制）であること。組織（家庭と教育・医療・福祉）の連携があって、そして次の段階へ行くようにすることが大切であると言われました。園で出来る対応として、特性を知る、気になる子どもの発達を知る、支援し記録を取る、関係機関と連携する、相談機関への紹介、巡回相談の利用、小学校への連携だと言われます。目の前の子ども一人ひとりに合った支援を見つけて保育していくことは毎日が試行錯誤です。上手くいったケース、どうしても上手くいかないケースもあります。そこで一人で問題を抱えるのではなく、職員（園全体）で対応していける関係があり支援がうまくいくのだと改めて感じることが出来ました。先生の講演を聞きながら自分だけで悩んでいた心がどこかほっとしたことを今も覚えています。まだまだ話を聞きたいなと思いながら2時間の講演時間はあっという間でした。この研修会で学んだことを私自身もスモールステップで支援していこうと思います。

## 第1回障がい児保育研修会に参加して

久松保育園　長谷　温子

平成23年度第1回障がい児保育研修会が、8月20日（土）福祉人材センターに於いて、また21日（日）ふれあいの里に於いて開催されました。講師に川崎医療福祉大学　重松孝治先生をお迎えして、「障がいをどうとらえるか」～子どもたちに向き合うために～というテーマで講演をしていただきました。

まず、障がいということをどう受け止め、どう保護者に伝え、どう子どもと接していくのかというお話から聞かせていただきました。障がいの診断は「レッテル」「ラベル」を貼るのでなくその子を理解しようとする一歩となる事を教えていただきました。保育園のように、幼い子どもは、自分のどうしてもできない事を、行動でしか表現できません。なぜ、このような行動をとってしまうのか、なぜ、他の子ども達のように行動ができないのか等の説明はできません。障がいを持っている子の困難さを療育の時間より長く接する事のできる保育園の先生方には理解していただいて、毎日出会えるというよい環境の中でゆっくりと子どもと接しながら、支援を工夫し、支援方法を子どもと一緒に振り返りつつ良い方法を見つけていって欲しいと話されました。支援とは、障がいがあっても豊かに生きる、持っている能力を発揮できるようになることが目標です。問題解決に終始しないで、その背景にある本人の困難さを支援する。「がんばりなさい」ではなく「～すればできる」を考え、成功体験の蓄積を大切にする。実現可能な目標を設定し、常にできたことをほめてあげることが大切と言われました。理解されない子ども達（見えない障がい）は、外見上は、特徴が分からないが、ある特定の周りには簡単なことが困難であったり、社会性や、上手く説明ができないといったコミュニケーションの問題をかかえることが多い。

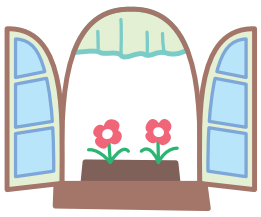
子どもを理解するためには、発達障がいの知識を持つ事。子どもの様子を観察し、話に耳を傾け、子どもを理解しようとする事が大切です。いろいろな支援方法を工夫し、本人の行動を観察し、方法を変えていく。子どもと一緒に考えていく事により、子どもの特性を知り、できる事、できない事を整理し、つまずきを理解していく事が支援につながっていく。社会的な情報も正確に伝え、がまんばかりでなく、気持ちの吐き出しを教えていく事も必要です。保育園においても、いろいろな気持ちの葛藤も見られた時は、少しずつ試しながら、良い方法を見つけていこうと思いました。焦らず、じっくりと取り組んでわかった事を家族に伝え、就学先にも伝えていっていただきたいとも話されました。就学後も、子ども達が豊かに生きていけるように、肯定的にとらえてもらい落ち着いて生活できるように支援方法等を就学先に伝え、家族の方とも、話し合いを密にし円滑な就学となるよう努めていきたいと思いました。就学前の保育園の役割の重要性を強く感じました。

## 今求められている保育者像と園長の責務
### 第2回施設長研修会

わかば台保育園　田中　妙子

平成23年8月24日（水）米子コンベンションセンターに於いて鳥取県内の施設長他141名参加のもと、白梅学園大学学長の汐見稔幸先生を講師にお迎えし、第2回施設長研修会が開催されました。その内容は、「今求められている保育者像と園長の責務」について、これから何が大切なのかしっかりしていないとつかみそこねる。教育・保育は未来社会に向けて取り組むことであるが、今の社会は、人類の歴史の中でもっとも変動が激しく先が読めない。しかし、園長には、園のミッション（指命）を明確にし、職員それぞれが輝くには・・・と常に考えることや、トラブルがあった時には先頭に立つことが必要である。また、園長は夢を語り特色ある保育を作り上げていくことで、日本の子どもをしっかり育てるというミッションを強く持つことが必要である。文明が発展してきた中で、子どものより良い育ちはほっとかれ、誰にも議論されてこなかったことにより今まで関わらなくても育ってきたものが期待できなくなってきた。昔遊びの中には、育ちに課題があってもそれを克服できる遊びが含まれていたが、出来なくなってきているので保育園でしなくてはならない。今は、〝家庭で取り組みを〟と働きかけているが、このままでは少子化や虐待に拍車をかけていく。昔は周りの支えがあったからできていたことであり、現代の親の手抜きではない。かえって今の方が子育てに神経質になっている。今進められている〝子ども子育て新システム〟は、地域社会で育ってきたものを保育所が担うようになったためのシステムである。

人の育ちは、動物脳の発達と人間脳の発達との共同操作ができるようにしないと不自然になる。まずは動物脳の発達が望まれるので3歳までのカリキュラムをしっかりとつくることが必要である。これには、生きていく上で大切なわざをいっぱい身につけていける自然体験が有効である。そのことが、コンピューター社会である現代から未来に向かって、人間がコンピューターを使える（使われるのではなく）ようになる。と、現在の子どもの育ちへの危機感から保育所保育の求められていること、更に園長に求められていることを、事例をあげてわかりやすく、しかしながらその危機感を前面に出してお話くださいました。保育所保育が今後進むべき方向が揺れ動いている現在において、子ども・保護者・地域社会の現状から求められていることを明確にお聞きすることが出来、それぞれの参加者が進むべき道に一筋の光を当てていただいたような思いになりました。



## 保育者の広場

### 食卓を囲むとき……

安部保育所　沖田勢津子

調理師という仕事がらなのか、いや小さい時からだったような気がします。〝食〟という事が大好きだったのは・・・・。

「食する」という事が私を不思議と幸せな気持ちにさせてくれます。でも、それは、一人でなくみんなで食べるという事がそうさせてくれたのではないかと思います。

人間にとって「食べる事」は生きる事の大切な一つである事はいうまでもありません。食べる事は、日々の生活の中であたり前の事であり、その食べるという行為が上手く行われることにより、家族の絆や食物への感謝、マナー等いろいろな事が身につくのではないでしょうか？

私も子どもの頃、家族揃って食卓を囲んで、食事の時間を過ごしてきました。

今は、保育所で子どもたちと一緒にいろんな話をしながら賑やかに楽しい給食の時間を送っています。我が家でも、料理好きな子どもたちとワイワイ言いながら調理して家族で食卓を囲んでいます。この春から、一人家を離れ、食卓の賑やかさが少し減り、寂しい気持ちもしますが・・・それだけに家族が囲む食卓の良さや喜びを感じます。

「食すること」家族で食卓を囲むというあたり前の光景が、昨今、少しずつ変化してきたと言われています。私は、大好きな家族と一緒に食事をすると言うことは、その日にあった嬉しかったこと、悲しかった事、腹が立った事など、食事のおかずの一品にしてしまうと、家族の笑いや慰めがそこにおこり、気持ちが落ち着いてきます。

食事を囲むという事は、心も体もお腹いっぱいになり、幸せに気持ちになれるのではないかと思っています。そんな時間をいつも過ごせたらいいなと・・・・。

保育所の子どもたちにもそんな時を過ごしてもらいたいと思っています。

家族や友人、大好きな人と一緒に食べる・同じものを食べる・同じ時間を過ごす、それが楽しく食べることにつながるのではないでしょうか？

きっと、子ども時代、家族みんなで食卓を囲んできた事が私の食に対する原点のようです。食卓を囲む事の大切さを、家族の中で、保育所の中で、今改めて見つめなおしてみたいと思います。

### 断捨離

北条みどり保育園　菅原　里美

最近、「断捨離」という言葉をよく目や耳にするようになりました。初めはその言葉にピンときませんでしたが、本屋さんでぱらっと見たり、インターネットで調べるうちに興味がわき、家の中をスッキリさせたいな…と挑戦してみることにしました。

まず本を買い、ざっと読んでみると「断捨離とは自分と物との関係を問い直し、暮らし・自分・人生を整えていくプロセス」と書いてありました。必要のない物を捨て、片づけることで、心も整理していける…確かに、掃除をした後は何だかスッキリします。とにかく、いらない物はどんどん捨てよう！と取りかかりました。ところが、自分の物でない物はわりと捨てることが出来るのに、直接自分の物となると「この服、高かった

からもったいないな」とか「いつか使うかもしれない」という気持ちになり、なかなか捨てる決断が出来ません。廃材でも、「何かに使えそう」と捨てずに置いておこうとする一種の職業病（？）も、あるのかもしれません（笑）。

これを始めよう！と意気込んで買っても、買ったことで満足していたり、試供品などタダで貰ったことで得をした気になったり…。そう思ってみると、「今」の自分には必要ない物がわりとあることに気づかされました。改めて本を読み返してみると、「使えるけど使わないなら意味がない」「使えるか使えないかではなく、使うか使わないか」とありました。

いろいろな物があふれている今日、今の自分に必要・適切・快適な物が見極められるようになりたいです。もう少し時間がかかるかもしれませんが、断捨離が出来ると気持ちの持ち方が変わったり、いいことにつながりそうなので、がんばりたいと思います。

## つながる食育

いづみ保育園

# 食育の取り組み

０歳から１歳児（低月齢児）27名の分園と１歳児（高月齢児）から５歳児95名の本園と２ケ所に分かれて生活しています。

それぞれに給食室が設けられ、給食担当者・保育者が連携を取りながら「食育は保育そのもの」と考え、離乳食やアレルギー食の取り組みなど一人ひとりの子どもによりよい食環境を整える為の取り組みをしています。

本園では、栽培活動（水稲栽培・芋の苗植え）やお泊り保育でのカレー作りをしています。分園は、給食担当者と共に「楽しく食べる」事を中心に活動しています。今回、担当している分園１歳児の子どもたちの日々の生活を振り返りながら、「食育とは何か?」を考えてみたいと思います。

### ○ 取り組みにあたって

食育の大切さが叫ばれている昨今、保育所で具体的にどのように子どもたちと向き合い、日々の保育に取り入れ指導していくかを考えました。現代の子どもは、偏食も多くその原因の一つに食体験の乏しさもあげられます。噛む力・飲み込みが悪い子どもにどのように食材を調理し離乳食を進めていくのか、給食担当者と話し合いました。話し合いの中で、「子どもが食に関心を持つ環境をつくることの大切さ」ということの給食担当者の思いを聞き、まずは、食への「感謝の気持ち・命を大切にする気持ち」が持てる給食時間のかかわり等を配慮してみることにしました。

### ○ お腹が空くリズム生活

楽しく食べる生活とは、睡眠・遊び・食事の生活リズムをバランスよくつなげることが一番この年齢には大切だと感じます。できることとして、家庭での朝の授乳・朝食の大切さを保護者に園だより・クラスだよりで知らせたり、園の生活ではおもいっきり体を動かして遊べる活動を考慮してお腹が空くリズムを整えていくことに力を入れました。

### ○ 給食担当者も給食時間に加わり人間関係を豊かに

保育者や友だちが好きになり、信頼関係ができると食事の雰囲気も和やかで、おいしく楽しくみんなで食事ができるようにもなってきました。また、苦手な食材があっても友達の食べる様子や保育者がおいしそうに食べる姿を見せることで、挑戦して食する姿も伺えるようになってきます。そして、給食担当者が給食を作っている顔を子どもにも見せ、一緒にいる保育者が食材や献立名を知らせ、どんな味がするのか話しながら「きょうの○○のおかずはすっぱい味がするよ」などと味覚も伝え、誰がどんなふうに調理したのかも知らせる場面も作っています。その他のかかわりとして、給食担当者と一緒に挨拶をして子どもたちと食べるように配慮しています。もちろん声かけをしながら、スプーンやフォークの持ち方も手を添えて知らせています。食事を終えて、食器の片づけをして給食室に行こうとすると給食担当者に子どもたちからの感謝の気持ちなのか「バイバイ」と手を振って見送る微笑ましい姿も見られるようになりました。

日常生活で子どもたちに「食の大切さ」を感じ取ってもらう為に、歌を唄って手洗いの習慣を知らせたり、保育の一環としての給食と捉えて、絵本・紙芝居を読んで確認していくことも配慮しています。

### ○ 園と家庭のつながり

園から家庭への情報発信として給食だより・献立表も目で見てわかるようにイラストを加えながら、季節感も感じてもらえるような工夫をして配布しています。

給食だよりは、毎月のテーマに沿って、子どもの姿を通して伝えていくようにしています。また、サンプルの展示と毎月の献立からおすすめレシピを作成したり、誕生会には保護者を招待して、園の生活を知っていただくことも含めて給食を食べて、子どもの成長をお祝いく取り組みとしています。

保護者の姿の中には、給食担当者に離乳食の作り方を聞いたり、アレルギー食について相談されたりと給食への関心もかなり強くなってきたと感じています。

### ○ 地域とのつながり

年一回、地域のお年寄りの方や園児の祖父母・近隣のデイサービスに来られている高齢者の方を敬老会に招待して、子どもたちと一緒に遊んだり会食をする行事も計画実施し、園の実情や子どもの成長には大人のかかわりがあって大きくなることも知ってもらう機会にしています。

### ○ まとめ

日々の生活の繰り返しで好き嫌いも減少し、給食時間を待ちわびる姿に変容したり、一緒に食事をしてくれる担任や給食担当者と共に楽しい時間を過ごすことの習慣が要因となり、安定した生活で過ごす大切さを痛感しました。やはり、新年度から毎日同じ生活リズムの繰り返しをしたことと、一つひとつの行動には意味があることを保育者間で話し合い、実践に結び付けてきた事も成果につながったのではと思います。低年齢の時期にしっかりとした生活リズムと保護者と共に歩むことが、豊かな子どもへの成長につながる土台づくりにつながったと思います。この土台をしっかり踏みしめ、次のステップにつながる取り組みとして、それぞれの子どもの発達を踏まえ、自園としての「食育のあり方」を全職員で共通理解し、子どもにとってまた保護者にとっての「食育とは?」を再度考えていきたいと思っています。あたり前のことですが、自分自身がかかわった子どもの姿を振り返り、感じた事をまとめてみました。子どもを中心に据え、保育園であれば全職員。家庭であれば家族。それぞれがそれぞれの役割を果たす話し合いのもとに子どもの成長を願う共育ちを今後の課題として考えていきたいと思います。

あそびうたグループ紹介

# ～自分たちが楽しんでいる～

## ジャングル★ジム

鳥取県は言わずと知れたあそびうたの宝庫。昨年開催された「第2回Ａ1あそびうたグランプリ」（全国のあそびうた作家が一堂に集い、日本一のあそびうたを決定するあそびうたの祭典）では本選出場20組中3組が鳥取県から出場という快挙を成し遂げ、関係者の注目を集めました。今回はそんな数多い県内のあそびうたグループの中から、7月17日に3枚目となるオリジナルアルバム「Ｖ3」を発表したばかりの鳥取市男性保育士会「ジャングル★ジム」江嶋大輔代表（以下、Ｅ）にお話を聞きました。

**―ジャングル★ジムとはどういうグループなのですか？**

Ｅ「元々は少数派である男性保育士の交流の場でしたが、ボランティアで大道芸やダンスなど子どもたちに楽しんでもらえる出し物をするようになり、それが口コミで広がって保育園の夕涼み会等に呼ばれるようになりました。現在はバンドチームの他、ブレイクダンス、寸劇、バルーンアートなどメンバー25名が各々の特技をステージで披露しています。」

**―ジャングル★ジムはオリジナル曲にこだわり、ステージで演奏される曲は全て自作と伺いましたが、詞や曲はどのようにして作られるのですか？**

Ｅ「活動初期はそれぞれが持ち寄った曲を聴き比べたりステージで試したりしながら練り上げていきましたが、近年は作曲合宿というものを行いメンバー共作で作ることが多くなりました。手遊び等もアイデアが集まると1人で考えるより面白いものが出来ることがあります。まだＣＤに入っていない自信作もありますよ。ぜひライブに遊びに来て下さい。」

**―ライブはどのようなところで行われているのですか？**

Ｅ「毎年夏に鳥取砂丘こどもの国で行っているサマーキッズコンサートが僕たちの活動の原点になっていますが、秋から冬にかけてもいろいろなイベントに声をかけて頂いています。詳しくはＨＰ（〝鳥取市男性保育士会〟で検索）で。ライブの楽しさは、自分たちのアイデアを試せるところ。ウケると〝やった感〟を感じますし、子どもたちが夢中で楽しんでくれている姿を見ると嬉しくなります。」

**―ジャングル★ジムの活動は今後どのように展開していくのでしょう？**

Ｅ「これからも今のスタンスを守りながら続けていきたいと思っています。とりあえず僕は誰かに代表を代わって欲しい（笑）。ジャングルは自分たちが楽しいからやっているグループです。呼んで下さるところがあることが嬉しいし、自分たちが作った歌や遊びが仕事（保育）に生かせることに面白さも感じています。来年は結成10周年という節目の年。何かみんなの思い出に残るようなことがやりたいですね。」

**―ありがとうございました。これからもがんばって下さいね！**

Ｅ「ありがとうございました。」

ジャングル★ジムではＣＤの売り上げの一部を東日本大震災の義捐金として送られる予定とのこと。私も聴かせて頂きましたが、本当にメンバーが楽しんで歌っている姿が瞼に浮かんでくるような素敵なＣＤでした。

## ＜絵本の紹介＞

### 「ケイゾウさんは四月がきらいです」

お話　市川　宣子
絵　　さとうあや（福音館書店）
ISBN：978-4-8340-2198-1　定価 1,365円（税込）

ケイゾウさんは幼稚園に飼われているにわとりです。うさぎの「みみこ」と同居しています。

いつもみみこに振り回され、こどもたちに冷たくあしらわれてもついついみんなの世話をやいてしまうケイゾウさん。そして最後には必ず悲惨な結末が待ち受けています。

底抜けにお人よし（にわとりよし？）でおせっかいなケイゾウさんの哀愁がユーモラスに描かれていて、かわいそうだけど思わず笑ってしまいます。そしてひどい目にあってもそれでもおせっかいをやいてしまうケイゾウさんにちょっと共感してしまうのは私だけでしょうか。

### 「ひとりぼっちのガブ」

作　きたむらゆういち（講談社）
絵　あべ弘士
ISBN：978-4-06-278505-1　定価 1,400円（税別）

「あらしのよるに」の主人公、オオカミのガブが小さな頃のはなしです。

いろいろなことを教えてくれ、大好きだったお父さんがなくなり、毎日「何をしていいのか！」わからなくなったガブ…。友だちのグリルなら自分のことをわかってくれるはずとグリルのもとへ。しかしそこでは、グリルとの力くらべを、させられることに…ともだちに順番をつけるのが好きになれなかったガブは……

「あらしのよるに」の主人公、オオカミのカブが小さかったころのおはなしです。

ほんとうに、しんじられる ともだちがほしい！たたかわなくてもいい ともだちが…。ほんとうのともだちとは…ちょっとせつなく今一度、わたしたちに問いかけてくれているステキな絵本です。

## ＜職員図書紹介＞

### 「生涯発達の心理学」

著者　高橋　恵子、波多野誼余夫（岩波書店）
ISBN：4-00-430152-1　　定価 756円（税込）

運動の翌々日に筋肉痛がでたり、胸囲と腹囲が同じになったり、２階に上がる間に用事を忘れたり。日々発達する子どもと違って、中高年は衰えるだけの存在だと思っていませんか。ところが、さにあらず。中高年だってちゃんと発達してるんです。

本書では人間の一生涯を見通しながら発達を考える「生涯発達心理学」の立場から、ヒトの発達が論じられます。中高年の発達とは何か。子どもの発達とどう関連しているのか。生涯発達心理学の新しい知見から、子供の発達の捉え方はどのように変わったのか。

部分だけ見て解らなかったことが、全体から部分を眺めたときに解ることがあります。そうした意味で「目から鱗」の１冊といえるかもしれません。

## 編集後記

一度も海に行かないうちに夏が終わり、最近まで「秋冬新作続々入荷中」だったネットのショッピングサイトも既に「入荷待ち」ばっかりに。季節の巡るのは早いものですね。（Ｍ・Ｍ）

猛暑の夏、園で一番暑い部屋ですごしながらも子ども達に元気パワーをもらい乗り越え、運動会を終え、ホッと一息…とはいかない現実！しかし、大きな自然災害も受けずに生活できていることを子ども達とともに〝感謝〟の気持ちを持ってすごしています。（Ｆ・Ｉ）

津波想定、山へ全速力で避難する『山の日』。困難なのは、おんぶや、避難者の０・１才児。素早く逃げる難しさ。子どもたちを懸命に守り、保育士の使命を果たされた皆さんの頑張り、感じずにはいられません。（Ｈ・Ｈ）

先日高校生の娘が電車の中に携帯を落としてしまった。ガーン!!ダメ元で車掌さんに聞きに行かせたところ、なんと、2日後にぴかぴかになって娘の手元に戻ってきた。聞いてみるもんだ。関わってくれたたくさんの人に感謝!!（Ｙ・Ａ）

秋は「食欲の秋」「読書の秋」「運動の秋」とよく言いますが、わたくし事ですが先日運動会でリレーに出場、気持ちは前へ前へと行っていても身体はそうはいかない…。年はとりたくないもの…身体はぼろぼろ、物の名前もすぐに忘れて出てこない。「あれを　あーして　こーして…」といえば「あーにー　こーにーか？」との返事。ツーといえばカーとわかってしまう　私たちは同年代!!（Ｔ・Ｉ）

我が家の小2になる息子は、宿題を減らすため連絡ノートのメモを消しゴムで消す。そして、バレたら次回はプリントも隠す。こうしてただんだんトラットプの数は増えていき、現在宿題に辿り着くまでに5重の仕掛けを乗り越えなくてはならない状況だ。その労力と時間を最初から宿題に向けていれば…と思うが、子どもの仕掛けたトラップをひとつずつ解き明かし、追い詰めていくその課程も楽しい。（Ｄ・Ｙ）